岐阜大学機関リポジトリ
Gifu University Institutional Repository

戦争と人権

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 岐阜大学図書館 公開日: 2024-04-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上野, 友也 メールアドレス: 所属: 岐阜大学
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/0002000552

「戦争と人権」

上野　友也

現代の世界において戦争と人権の問題は、依然として人間にとって重大な課題である。2022 年からのイスラエルによるガザ地区への侵攻では、多くの市民が戦争の犠牲になり、その悲惨な光景がグローバルなメディアを通じて私たちに迫りくる。なぜ、人間は残虐な方法を用いて他者を殺害するのであろうか。地球上には比較的恵まれた人間がいる一方で、なぜ武器で無残にも殺される人がいるのであろうか。そもそも人間にとって戦争とは何なのだろうか。そのような疑問をもつ人も多いであろう。ここからは、いくつかの書物を紹介するなかで、戦争と人権の課題について考えていこう。

戦場において民間人（正確には文民という）が大量に殺害されるようになったのは、20 世紀からである。それまでの戦争の主役は兵士であり、戦闘は兵士のあいだで行われた。そのため、戦争の犠牲者は兵士に集中した。ところが、20 世紀の世界大戦においては、兵士の戦闘に民間人が巻き込まれて殺害されたり、貧困や飢餓に陥ったりすることが増えてきた。

国際政治学者のメアリー・カルドーは、著書『新戦争論―グローバル時代の組織的暴力』*1 のなかで、民間人が国家間戦争に巻き込まれるだけでなく、昨今の戦争では民間人が故意に傷つけられていると指摘した。それはなぜなのか。カルドーは、三つの点を指摘する。第一は、戦争の目標の変化である。国家間戦争の目的の多くは領土の拡張にあったが、現在の戦争の目的は異質なアイデンティティをもつ人びとの排除にある。敵対する宗教、民族、言語を保持する人びとを排除するために暴力を用いる。第二は、戦争の形態の変化である。以前の国家間戦争の主役は国家であるが、現在では武装集団やテロリストが主役となり、その暴力を用いて住民を支配する。第三は、国家間戦争のように公式の予算を用いた戦争とは異なり、現代の戦争は、略奪、誘拐、闇市場、外部からの援助といった方法を用いた戦争経済と結びついている。カルドーは、新しい戦争のすべてがそれらの性質をもっているのではなく、そのような傾向が頻繁に見られるようになったと主張した。たとえば、ユーゴスラヴィアでは民族運動が高まり、とくにボスニア内戦においては、民間人の多くが暴力の被害を受けた。それには、殺傷、強制収容所への収容、拷問、組織的な性暴力などの暴力が含まれる。ルワンダでも、トゥチ人の多くがフトゥ人の武装集団と住民によって殺害された。フトゥ人の多くは、フトゥの政権がトゥチ人に打倒されたのちトゥチ人からの報復を恐れて、隣国に難民として脱出した。

2001 年 9 月 11 日にアメリカ同時多発テロリズム事件が発生し、多くの民間人がアルカイーダのテロ攻撃によって犠牲になった。それを受けて、アメリカはアルカイーダを匿うアフガニスタンのタリバーン政権を打倒するために、アフガニスタン戦争を引き起こした。中東研究の第一人者である酒井啓子は、著書『9.11 後の現代史』*2 のなかで、アフガニスタン戦争のほかイラク戦争やアラブの春といった中東における一連の政治変動を的確に分析する。それは、これらの政治変動が国家間戦争によって生じるというよりは、比較的小規模な武力衝突やテロリストの攻撃といった新たな形態によってもたらされている。また、酒井はこれらの紛争の原因に宗派対立があると指摘されることに対して、政治指導者や武装集団間の対立がその根底にあり、宗派が異なるだけで紛争が起きるわけではないと指摘する。

2011 年、チュニジアで長期独裁政権が市民の力によって打倒された。それを起点として中東において

政権の打倒を訴える動きがみられるようになった。シリアにおいてもアサド大統領が市民を抑圧し、これに反発した市民が政府に対して決起した。しかし、市民の政治的抵抗もむなしく、シリアではイスラーム国をはじめとする多様な武装集団が群雄割拠を繰り広げる事態に陥り、民間人のなかにはシリアよりも安全な場所へ脱出してヨーロッパで難民になることを希望する人も増えた。シリアからの難民がバルカン半島を通って憧れの土地ドイツを目指す。難民の日常に密着して、その苦難を伝えているのが、坂口裕彦の『ルポ難民追跡―バルカンルートを行く』*3 である。

ヨーロッパや中東の戦争には世界が関心を向けるが、アフリカの戦争については報道される量は少ない。1991 年にソマリアの政府が打倒されたのち、安定的な政府が樹立できず、無政府状態に陥っている。現在においても、南西部ではテロリスト集団であるアルシャバーブが支配し、北西部ではソマリランドが建国されている。そのソマリアでは武装集団やテロリストが権力欲を満たすために民間人に暴力を振るっている。そのようななか、永井陽右は、ソマリアのギャングに出入りする若者を脱過激化するために NGO を立ち上げて現地で活動している。その経験は『ぼくは 13 歳、任務は自爆テロ。――テロと紛争をなくすために必要なこと』*4 において詳細に述べられている。

これまで戦争と人権について、いくつかの書物を参考にしながら考えてきた。ここで最初の問いに戻って考えてみよう。そもそもなぜ人間は武器を用いて他者を殺害するのであろうか。単純に宗教や民族の違いから生じているのではない。その違いを利用している政治指導者や武装勢力が背後に存在しているからである。彼らはみずからの戦闘やテロ攻撃を正当化しようとする。そこで用いられる一つの方法が宗教による正当化である。宗教が正しければ、宗教に基づく暴力行為も正しい、敵対する人間を排除することも宗教上正しいという論理になる。それでは、その論理は正しいといえるのであろうか。宗教の相違、文化の相違、歴史の相違を持ち出して誰が何を獲得しているのか、そして、それは一部の人間が他者の生命と安全を犠牲にして権力欲を満たすために持ち出している論理に過ぎないのではないか。私たちはそのような観点から戦争を見直す必要がある。そのうえで、そのような一部の人びとの権力追求を見過ごすのではなく、人間の生命と安全が尊厳をもって最も尊重されるべきであることに立ち返ることが何よりも求められる。

（かみの　ともや：教育学部社会科教育講座（現代社会）　准教授）

文中の図書はすべて図書館で所蔵しています。

*1　新戦争論：グローバル時代の組織的暴力 / メアリー・カルドー［著］; 山本武彦, 渡部正樹訳【図本館 3 階 319.8||Kal】

*2　9.11 後の現代史 / 酒井啓子著【図本館教養図書コーナー302.27||Sak】

*3　ルポ難民追跡：バルカンルートを行く / 坂口裕彦著【図本館 3 階 369.38||Sak】

*4　ぼくは 13 歳、任務は自爆テロ。：テロと紛争をなくすために必要なこと / 永井陽右著【図本館 3 階 316.4||Nag】